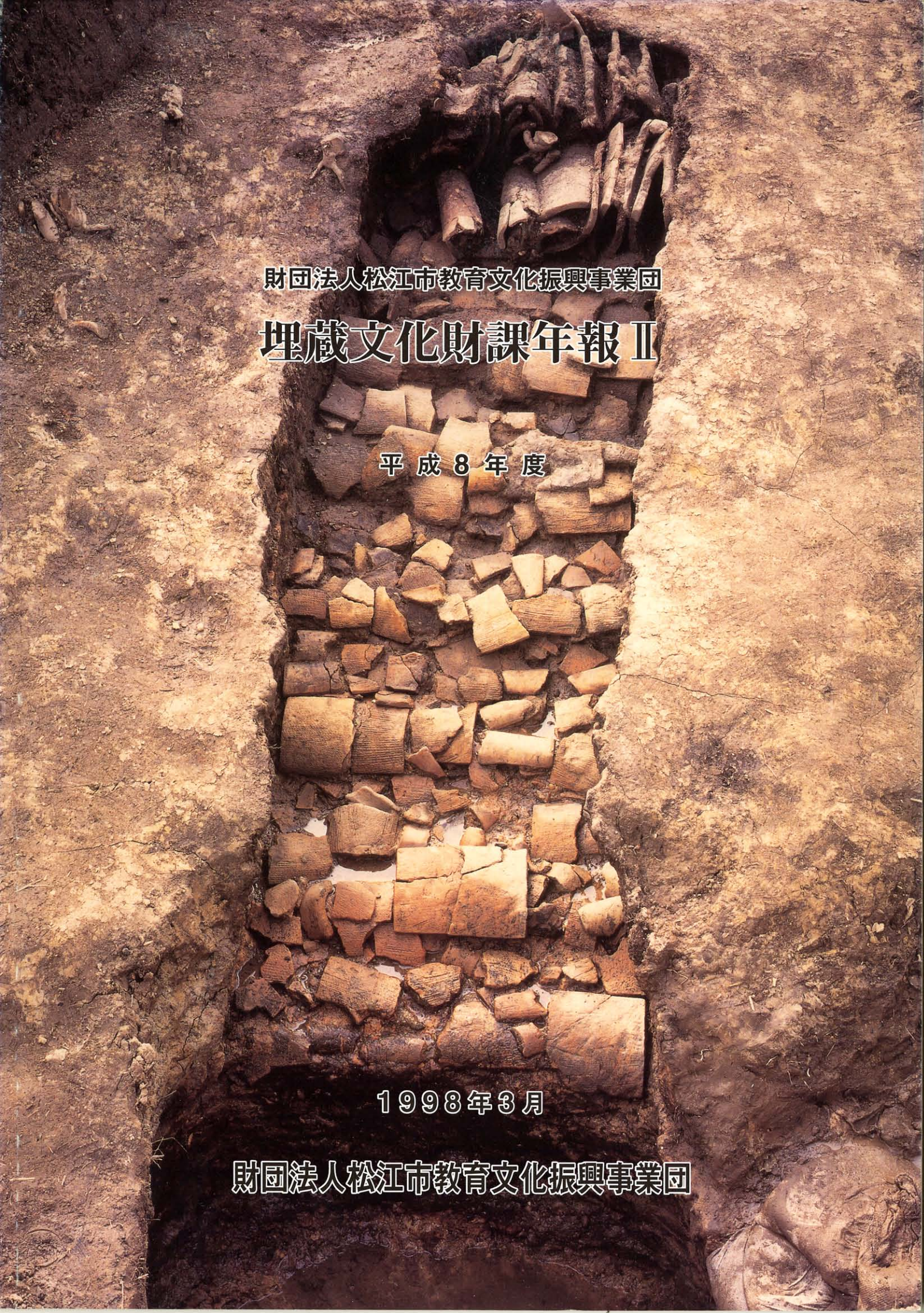


財団法人松江市教育文化振興事業団

# 埋蔵文化財課年報 II

平成8年度

1998年3月

財団法人松江市教育文化振興事業団

表紙写真　小無田Ⅱ遺跡３号窯（写真提供 島根県古代文化センター）

# 序　　文

財団法人松江市教育文化振興事業団では、平成８年度に５件の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果として、「出雲国風土記」に掲載されている山代郷新造院の一つである四王寺の瓦窯跡を発見し、具体的な内容を明らかにできたほか、古墳群や集落跡など各種の遺跡を調査し、貴重な成果をあげることができました。

新たな調査成果は、郷土の歴史をかたるうえで重要な資料になると信じております。

本年報が、ひろく皆様の埋蔵文化財への理解を深めていただくための一助となり、また、より一層郷土の歴史に関する知識を豊かにしていただけるものとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、本財団の発掘調査にご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者、市民の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご支援、ご協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

平成10年３月

財団法人松江市教育文化振興事業団
理事長　大　塚　雄　史

# 目　　次

序文

第１章　財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織 …… 1

第２章　発掘調査 …… 4

小無田Ⅱ遺跡 …… 6

米坂古墳群 …… 8

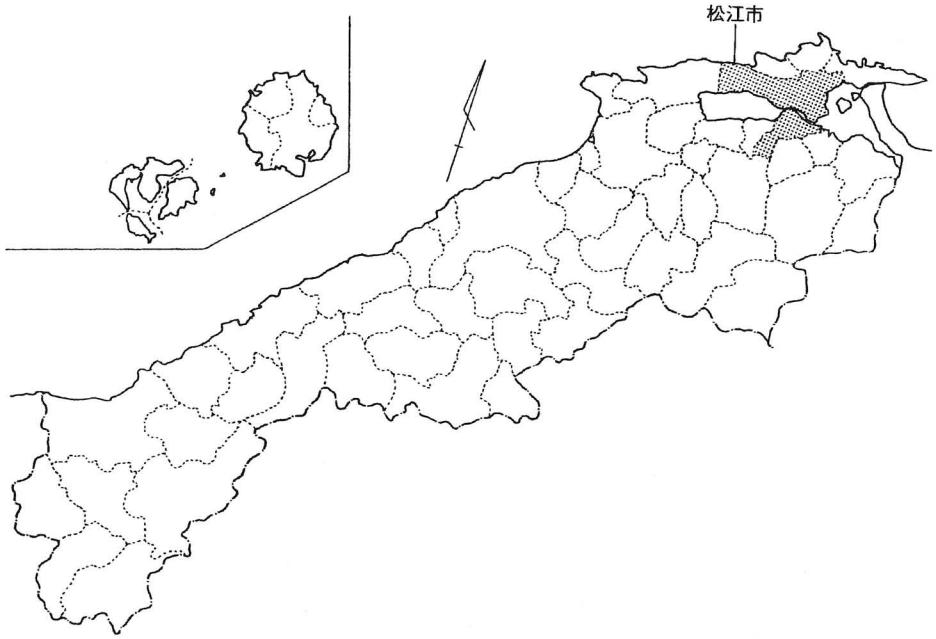
柴Ⅲ遺跡 …… 10

袋尻遺跡群 …… 12

松江北東部遺跡 …… 20

第３章　普及活動 …… 23

第４章　平成７年度以前の調査状況 …… 24



# 第　1　章

# 財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織

◇　**設　立**　昭和51年(1976年) 4月1日

◇　**所在地**　島根県松江市西川津町3562番地

◇　**目　的**　事業団は、松江市及び松江市教育委員会の基本的施策に即応して、その委託を受けた事業及び市内の教育・文化・スポーツの振興に関する事業を行い、もって市政の発展と市民の福祉向上に寄与することを目的とする。

◇　**事　業**　前記の目的を達成するため次の事業を行う。

(1) 松江市及び松江市教育委員会から委託を受けた教育・文化・スポーツ等に関する施設の管理運営。

(2) 教育・文化・スポーツの振興に必要な事業。

(3) その他、事業団の目的を達成するため必要な事業。

◇　**組　織**

- 理事会 — 事務局長
  - 総務課 — 課長（局長兼務） — 次長 — 庶務経理係
  - 北公園運動施設管理事務所 — 所長 — 業務係
    - 松江市総合体育館
    - 屋内温水プール
    - 松江市北庭球場
    - 松江市北運動広場
  - 総合運動公園運動施設管理事務所 — 所長 — 業務係
    - 松江市営陸上競技場
    - 松江市営補助競技場
    - 松江市営野球場
    - 松江市営庭球場
    - 松江市営南運動広場
    - 楽山野球場
    - 楽山庭球場
  - 松江海洋センター管理事務所 — 所長 — 業務係
    - 第1体育館
    - 第2体育館
    - 舟艇
    - スポーツ広場
  - 松江郷土館 — 館長 — 学芸顧問 — 業務係
  - 埋蔵文化課 — 課長（局長兼務） — 調査係

★ 埋蔵文化財課

・設　　立　　平成５年７月１日

・所 在 地　　松江市母衣町180 - 21番地

・仕事の内容　　1) 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

2) 埋蔵文化財発掘調査にかかる庶務経理に関すること。

・職　　員

| | |
|---|---|
| 課長（事務局長兼務） | 板垣　信治 |
| 調査係長 | 瀬古　諒子 |
| 調査員 | 昌子　寛光 |
| 調査員 | 金山　正樹 |
| 調査員 | 江川　幸子 |
| 調査員 | 石川　崇 |
| 調査員 | 曽田　辰雄 |
| 調査員 | 落合　昭久 |
| 主事 | 後藤　哲男 |
| 調査補助員 | 宮本亜希子 |
| 調査補助員 | 広濱　貴子 |
| 調査補助員 | 松下　剛 |
| 調査補助員 | 藤崎　和子 |
| 調査補助員 | 門脇　千穂 |
| 調査補助員 | 平木　敏枝 |

発掘調査作業風景

# 第２章　発掘調査

松江市における平成８年度（1996年）の本財団の発掘調査受託事業は５件である。

調査原因は土地造成１件、宅地造成２件、道路建設１件、圃場整備１件である。中でも第２卸商業団地造成面積は非常に広大で、これにかかる袋尻遺跡群の調査面積は群を抜いており、幅広い時代の各種の遺跡を調査することとなった。また、宅地造成を原因とする小無田Ⅱ遺跡調査では、出雲国風土記に記載がありながら正確な寺域が把握されていない、四王寺に使用したと考えられる瓦窯跡を発見、調査したことは特に貴重な成果であったと考える。

以下、時代ごとに調査成果をまとめることとする。

弥生時代　柴Ⅲ遺跡で後期の竪穴住居２棟を検出し、うち１棟は玉作工房跡であることを確認した。袋尻遺跡群Ｅ遺跡でも後期の竪穴住居１棟を検出した。松江北東部遺跡７工区のトレンチ調査では遺物包含層の中から大量の土器片が出土したほか、原ノ後地区では後期の竪穴住居１棟を検出した。

古墳時代　松江北東部遺跡７工区の遺物包含層の中から子持勾玉を含む大量の土器片が出土し、原ノ後地区で後期の竪穴住居２棟、掘立柱建物跡２棟を検出した。墳墓関連では、米坂古墳群で中期～後期の方墳７基、墳丘を持たない埋葬施設８基を検出し、袋尻遺跡群で前期古墳７基、横穴墓３穴を検出した。

白鳳～奈良時代　小無田Ⅱ遺跡で四王寺の瓦窯跡３基を検出した。柴Ⅲ遺跡では、遺物包含層の中から土器片少々が出土し、掘立柱建物跡１棟を検出した。

平安時代　柴Ⅲ遺跡で遺物包含層の中から土器片少々が出土し、前半の掘立柱建物跡７棟を検出した。

鎌倉時代　松江北東部遺跡10工区で、土師質土器の皿が集中して置かれた祭祀様遺構を検出した。

室町時代　袋尻遺跡群の古墓群で、五輪塔や骨壷が出土し、墓壙と思われる土壙群を検出した。これらは出土遺物より、室町後期に始まって江戸時代まで営まれたと考えられる。

| | 遺　跡　名 | 種　　類 | 員数 | 所在地 | 調査原因 | 調査面積 | 調査期間 | 担当 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小無田Ⅱ遺跡 | 窯跡 | 3基 | 山代町 | 宅地造成 | 1,750㎡ | 96.07.22～97.03.18 | 瀬古 |
| 2 | 米坂古墳群 | 古墳群 | 7基 | 西尾町 | 道路工事 | 3,000㎡ | 96.05.31～97.02.21 | 江川 |
| 3 | 柴Ⅲ遺跡 | 集落跡 | 1所 | 西川津町 | 宅地造成 | 1,850㎡ | 96.05.20～97.02.18 | 昌子 |
| 4 | 袋尻遺跡群 | 散布地・古墳群<br>横穴墓群・古墓群 | 17所 | 平成町<br>(乃白町) | 土地造成 | 6,890㎡ | 96.04.15～96.12.24 | 金山 |
| 5 | 松江北東部遺跡 | 条里制 | 2所 | 上本庄町 | 圃場整備 | 622㎡ | 96.04.22～96.07.18<br>96.10.15～96.12.24 | 瀬古<br>石川 |

**平成８年度調査実績一覧**

調査地位置図 （1／25000）

# 小無田Ⅱ遺跡

本遺跡は松江市南郊の山代町地内にある低丘陵の北向緩斜面に位置している。現況は畑地である。

この低丘陵地では、これまで、須恵器、土師器、瓦などの破片が採集され、散布地として知られるほか、奈良時代（733年）に勘造された『出雲国風土記』の記載から意宇軍団跡や黒田駅跡、山陰道跡の存在が推定されてきた。昭和58年には島根県教育委員会によって丘陵中央部の発掘調査が実施され、掘立柱建物跡、土壙、溝状遺構などが検出され、丘陵全体に遺構の広がる可能性が指摘された。

今回の調査は、民間の宅地開発計画が契機となって実施したものであり、工事予定区域である丘陵地北辺部を対象とした。

以下、調査の概略を記す。

調査地の南半分（丘陵頂部寄り）は長芋の作付により地山面まで撹乱を受けて、遺構は無かった。

北半分では遺構が比較的良好な状態で残存しており、古代の瓦窯跡をはじめとして、古墳時代の溝状遺構、中世の掘立柱建物跡、土壙墓、近世の道路状遺構、時期不明、用途不明の円形土壙、風倒木痕などが検出された。

古代瓦窯は出土した軒平瓦の瓦当文様と、熨斗（のし）瓦の形態及び規格から、山代郷新造院跡の瓦を焼いていた窯であることがわかった。山代郷新造院（四王寺）跡は今回の調査地北方100ｍ余りの茶臼山南麓に所在し、島根県教育委員会による数次の発掘調査の結果、風土記に記載された新造院として確認されている。

出土した軒平瓦は２種類あり、山代郷南新造院跡の調査成果に基づく分類によると、四王寺０類とⅡ類に当たる。０類は内区に忍冬唐草文、外区に珠文をおき、顎に段をつくるものであり、Ⅱ類は内区に均整唐草文と中心飾りを配し、外区は素文で顎は曲線又は直線状に作るものである。

窯跡は３基あり、いずれも当初登窯として作られるが、２号窯だけは後に平窯に作り変えられている。

１号窯は後世に大部分が削平されて残存全長は４ｍ、燃料を燃やす燃焼室と生瓦を並べて焼く焼成室の床面が残っているだけであった。燃焼室と焼成室は階（かい）と呼ばれる段差によって分けられ、焼成室の床面は緩やかな段差をなし、６段分が残存していた。遺物は主に燃焼室にずり落ちた状態で発見された。平瓦、丸瓦熨斗瓦の他、スサ入りの窯壁塊が出ている。地形と窯の残存状況から見て、半地下式の窯と見られる。

２号窯は当初は登窯として操業していたものであるが、焼成室の段の上に残されていたほとんどまだ粘土に近い生焼瓦の状態からすると、火入れの最中に天井が落ちたので一旦はこの窯を放棄するが、あまり時間をおかずに焼成室の前半を削り込み、さらに石や瓦を粘土で塗り込めて前面に付け足しを行なって平坦面を作り出し、登窯の中に平窯を築いている。焼成室の床には平瓦や丸瓦の破片を敷き、側壁、前壁は平瓦と粘土を積み重ねている。奥壁と煙出しは残っていない。調査範囲における平窯の燃焼室から登窯の煙道残存部までの全長は約６ｍである。軒平瓦の０類とⅡ類は側壁の瓦積の一部に

使われていた。平窯で焼成した瓦は残っていなかった。

3号窯は燃焼室と焼成室が残存し、残存全長は約4.5mである。焼成室は生瓦を並べて焼くための瓦敷きの段が8段設けられており、最奥部の2段に生焼け状態のまま放置されていた。窯詰めは瓦の側面を上下にし、燃焼室側から見たとき端面が合掌式に見える詰め方をしており、端面を上下に置く通例からすると異色である。燃焼室と焼成室の間の階（かい）は垂直に近く75cmもの段差をもっており、この窯の中では最もよく焼けていた。

今回発見された瓦窯から瓦を供給した山代郷南新造院（四王寺）は733年に勘造された『出雲国風土記』に飯石郡の小領、出雲臣弟山が建てたと記載されている寺である。この出雲臣弟山は746年には出雲国造になっている。この頃741年の詔によって国分寺造営も行われていたはずで、2号窯が平窯に改築された契機も新しい築窯技術の移入に伴うものではないかと思われる。

なお瓦窯跡についての熱残留磁気の測定結果は、1号窯跡が725±10年、2号窯跡が730±10年、3号窯跡が755±10年と出ている。

（瀬古諒子）

**2号窯検出状況**

# 米坂古墳群

米坂古墳群は和久羅山から派生する低丘陵の先端部に位置する、約30基の小規模古墳から構成される古墳群である。このたび古墳群の一部について農道建設が予定されたため、平成８年度において農道建設予定地内の古墳７基とその周辺区域について発掘調査を実施した。

調査の結果、墳丘や主体部の残存状況はきわめて悪かったが、古墳はいずれも一辺10ｍ前後を測る方墳で、狭い範囲内に互いに墳裾を接するように高密度に築かれていることが確認された。主体部は３・４・７号墳が土壙で、５号墳は石材の形状・散乱状況から石棺以外の石材を用いた施設であったと推察される。また、３・５号墳は主体部が方墳の辺に対して対角線方向に造られた特異なタイプの古墳であることがわかった。築造時期は周溝や主体部周辺からわずかに出土した遺物から判断して、１・２・７号墳が５世紀後半、５号墳が６世紀初頭、３号墳が６世紀半ばに築かれたものと考えられる。４・６号墳は遺物が出土しなかったため時期は不明である。

古墳群の周辺からは墳丘を持たない埋葬施設も８基（図中Ａ～Ｈ）検出した。出土遺物からＣ・Ｄ・Ｅは６世紀後半の造営と判断されたが、他は副葬遺物が無く時期は不明である。

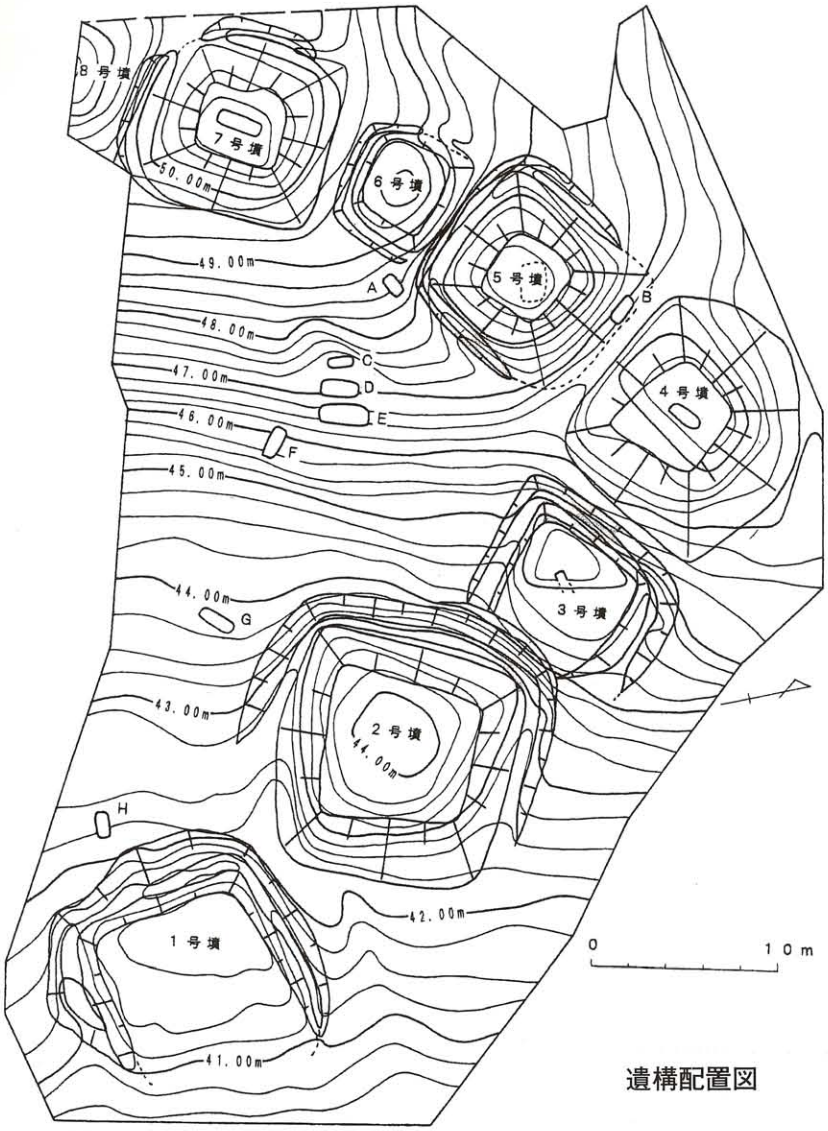
以上、米坂古墳群は内容が実に豊富であるため、ここでは簡単な概略を記した。詳細は、平成10年度刊行予定の「大井・西尾農道関係遺跡発掘調査報告書」の中に掲載するのでそれを参照されたい。

最後に、米坂古墳群の埋葬施設に葬られた人物の社会的立場を考える上で非常に興味深い遺構を検

墳丘検出状況（南西より）

出したので、少々私見を記してみたい。それは埋葬施設Dである。埋葬施設Dは墳丘こそ持たないが、斜面山手側にU字状の周溝が掘られているほか、側面・小口面が石囲いであり、床面には須恵器の蓋坏が敷き詰められた丁寧な造りである。頭部が安置されたと思われる場所からは碧玉製の玉類13点が出土した。ところが、屍床の蓋坏を観察すると、ほとんどが焼成時にひび割れや歪みが生じた個体ばかりで占められていた。この時期においてこれだけの須恵器の不良品を入手することができ、かつ玉類を所持できた人物像を推察すると、6世紀後半から飛躍的に生産量が増加した大井町周辺の須恵器生産に関与していた人物が浮かび上がってくるのである。

（江川幸子）




遺構配置図

埋葬施設C・D・E・F検出状況

# 柴Ⅲ遺跡

民間の宅地造成に伴い、平成８年５月20日より平成９年２月18日まで現地調査を実施した。

遺跡は国道431号線と同バイパスとの間の低丘陵の南向き及び東向き緩斜面に位置し、本遺跡が存在する同一丘陵の尾根上には以前は山崎古墳と柴古墳群が所在していた。

調査の結果、竪穴式住居跡を３棟、掘立柱建物跡を12棟、柱穴列を３条、等を検出したが、丘陵南側緩斜面では弥生時代後期の円形の竪穴式住居跡を１棟のみ検出し、それ以外の遺構は全て丘陵東側緩斜面で検出した。

まず、弥生時代終末期の２棟の竪穴式住居跡を検出したが、２棟共に平面形は隅丸方形であった。しかしそのうちの１棟の床面から1000点を越える夥しい量の青メノウの剥片と鉄器と思われる小片が出土した。このことより、この住居跡は、完成品及び未成品は出土しなかったが、青メノウのみを玉材とする玉作工房跡と判断でき、松江市内での当該時期のこの種の工房跡の調査例は今回が初例と思われる。また工房跡を１棟しか検出しなかったことより、一般集落の中に工房跡が１棟存在していたと考えられる。

12棟の掘立柱建物跡はすべて側柱造りの建物跡で、総柱造りの建物跡は１棟も検出されなかった。各建物跡の規模・床面積・柱間寸法・柱穴の掘り方の規模や形状・棟方位・伴出遺物などを検討すると、奈良時代後半に１棟、平安時代初頭に６棟、平安時代前半に１棟、の建物跡が存在したと思われるが、４棟については時期は不明であった。また平安時代初頭の２棟の建物跡には柵と思われる柱穴列が３条認められ、この集落の中心的な建物跡と思われる。

出土遺物をみると古くは縄文土器片が出土しているが、出土量としては奈良時代中頃から平安時代前半の須恵器が最も多かった。しかし、平安時代でも10世紀後半の土器は全く出土していないのに、11世紀代の徳利形壺が完形で柱穴内より倒立した状態で出土しており、その頃の建物跡が存在した可能性も否定できない。

調査の結果、この遺跡は弥生時代後期から終末期のごく短期間と奈良時代後期から平安時代中期のかなりの長期間、の二時期に“生活の場”として使用されていたことが判った。そしてこの遺跡の最も華やかな時期は、柵列を持つ2棟の掘立柱建物跡を中心に計6棟の掘立柱建物跡が検出された平安時代初頭の頃と思われる。

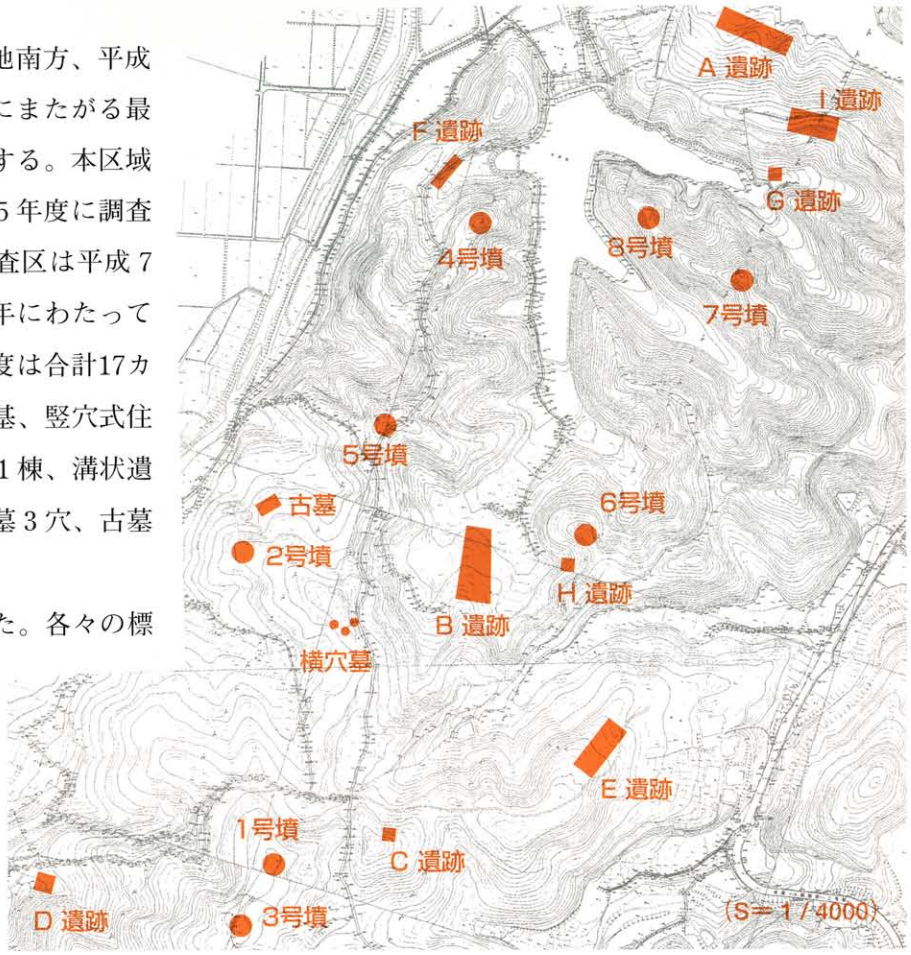
また、本遺跡のこのような二時期に亙る利用状況や平安時代初頭の使用様相を踏まえて、今後はこの遺跡が所在する川津地域全域での遺跡の変遷を詳細に分析していくと、川津地域の人々の定着、離散等の“人々の動き”を解明することになるものと思われる。

（昌子　寛光）

玉作工房跡

堀立柱建物跡

# 袋尻遺跡群




袋尻遺跡群は松江市街地南方、平成町（乃白町）及び大庭町にまたがる最高所97ｍの丘陵上に位置する。本区域内の菅沢谷横穴群は平成５年度に調査が終了している。残る調査区は平成７年度と平成８年度の２カ年にわたって調査を行った。平成８年度は合計17カ所の調査を行い、古墳６基、竪穴式住居跡１棟、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構３条、土壙３基、横穴墓３穴、古墓群を確認した。

古墳は６基調査を行った。各々の標高はおよそ50～60ｍの範囲に位置する。調査を行った２号墳、４号墳、５号墳、６号墳、７号墳、８号墳はいずれの古墳も地山を加工し盛土に使用している。６号墳以外は出土遺物や形態から考えて古墳時代前期頃の築造であると推定される。また、特筆すべき点として４号墳と８号墳から合わせ口の土器棺が検出されたことが挙げられる。両古墳は菅沢池を挟んで東西に位置しており、共に築造時期や土器棺の形態も似通っている。この時期には菅沢池を中心に古墳が築造されていることが窺える。

Ａ遺跡、Ｅ遺跡、Ｆ遺跡、Ｇ遺跡、Ｉ遺跡は遺物散布地として調査に入った。このうちＡ遺跡では掘立柱建物跡が、Ｅ遺跡では弥生時代後期頃の竪穴式住居跡が１棟ずつ検出され、溝状遺構はＥ遺跡で１条、Ｉ遺跡で２条検出された。散布地からの出土遺物は弥生時代中期から古墳時代にかけてのものが主であった。

横穴墓は３穴調査を行い、１号穴の石棺の中から人骨が２体、３号穴からは３体分の人骨が出土した。横穴の築造時期は出土遺物等からいずれも６世紀後半頃と考えられる。

古墓群からは土壙が12穴検出され、遺物として五輪塔の各部位が総数138点出土している。これらの古墓は五輪塔の形状や出土遺物から考えて室町時代後期頃のものと考えられる。

本年度調査を行った遺跡のうち４・８号墳、古墓、横穴墓について以下紹介したいと思う。

（曽田辰雄）

［袋尻４号墳］

袋尻遺跡群北側、標高43～45ｍの尾根頂部について調査をおこなった。

調査の結果、主体部と土器棺２棺、土壙２基を検出し、土器棺については西側を土器棺Ⅰ、東側を土器棺Ⅱと呼称した。

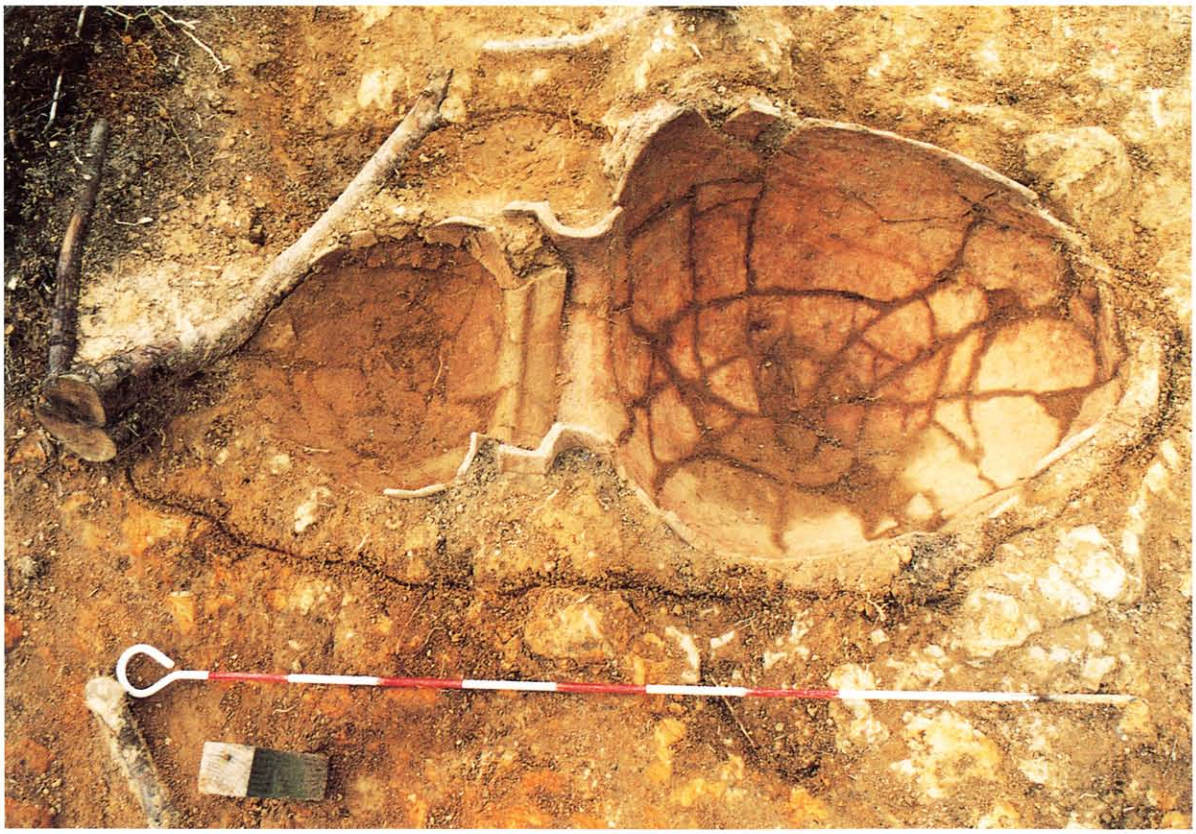
主体部は自然石を使用したものであったが、長年の風雨による墳頂部の流出などにより残存状況が悪く、その詳細は不明なところが多い。

土器棺Ⅰは、主体部の北東側より２つの壺が口縁部を合わせる形で検出された。これらの壺は西側の壺で高さ77㎝、最大幅56㎝、東側の壺で高さ37㎝、最大幅35㎝を測るものである。前者の西側の壺は頸部に綾杉状の沈線が、口縁部外側には５つ連続する竹管文がみられ、口縁部内側には黒色物が塗られている。いずれの壺も古墳時代前期のものと思われる。また、この西側の壺からは、鉄製品が２つ出土している。

土器棺Ⅱは、主体部の北東側の緩斜面に土器棺Ⅰと同様、２つの古墳時代前期の壺が口縁部を合わせる形で検出された。西側の壺は高さ45㎝、最大幅36㎝を測り、東側の壺は残存状況が悪い為、高さ、幅共に不明であった。

土壙は、主体部の東側より２基検出した。これらの土壙からはいずれも炭化物が検出されている。

墳丘については、周溝、墳裾ともに確認できなかった為、明確なことはわからないが、墳頂部の形容などから推察すると方墳であった可能性も考えられる。　（落合昭久）



土器棺検出状況

［袋尻８号墳］

袋尻８号墳は遺跡群のやや北側、標高40～41ｍの尾根筋上に位置する。上端径６ｍ、下端径14ｍの円墳と考えられる。主体部は隅丸方形で、長さ約257㎝、幅約90㎝、深さ約40㎝、地山から切り込まれていた。主体部の床面直上からは約６㎝前後の厚さでほぼ均一に灰色粘質土が検出されたことから、粘土を床に敷いていたと思われる。しかし主体部から副葬品は出土せず、そのほか周溝などの外部施設も検出されなかった。

墳丘から甕形の大型土器がおおよそ主体部を中心に両側の２カ所から出土した（１号土器、２・３号土器）。１号土器は主体部の北西側から単独で横倒しの状態で出土した。頸部に突帯がついているが全体に摩滅が激しいためそれ以外の詳細は不明である。２・３号土器は主体部の南東側から横倒しで２個体の口縁を合わせた「合口（あわせぐち）」の状態で出土した。３号土器の口縁部は意識的に打ち欠かれている形跡があり、２号土器に蓋をするような形で出土した。これらの土器は古墳時代前期の特徴を持っている。これらの土器の中からは出土遺物はなく、土器に密着するようにわずかに地山を掘り窪めていたと考えられる。

墳丘の大型土器は「土器棺」もしくは「供献土器」と考えられている。[1] 松本氏の分類によると、２・３号土器は横倒しであることや口縁部に蓋をしていることなどから「土器棺」として使用したと考えられるが、１号土器は横倒しではあるが口縁部に蓋がないことからどちらであるかは不明である。

（石川　崇）

(1)　松本岩雄「墳丘出土の大型土器」『山陰考古学の諸問題』1986年

袋尻11号墳出土の大型土器（２・３号土器）

［袋尻古墓群］

袋尻古墓は遺跡群の南西側に位置し、丘陵頂上部と中腹に平坦地がある。

遺構は円形と隅丸方形の土壙が12穴検出され、覆土層から土師質土器（かわらけ）が出土した土壙もあったが副葬品は出土しなかった。これは墓壙として使用されたものと思われる。丘陵の斜面からは小規模な横穴が２穴検出された。これは「窟墓（くつぼ）」のような埋葬に関わる施設と考えられる。丘陵中腹に９体の五輪塔の地輪と土台が安置されているのが確認され、その土台を安定させるための基壇状遺構も見られる。

五輪塔の各部分の総数は138点出土し（空風輪32点・火輪18点・水輪33点・地輪35点・土台13点・不明７点）、おそらく30基以上の五輪塔があったと推測される。土師質土器はそのほとんどが軟質で柔らかく形状が判断できるものは数点にすぎず、ほとんどが摩滅した破片であった。形状はほとんどが小型で底部が広く器高の低い皿型で底部には回転糸切りによる切り離しの痕跡が見られる。また古銭（洪武通寶）が丘陵頂上部の平坦地から五輪塔と一緒に１枚出土した。中腹の平坦地からは陶製の骨壷が出土し、中からは人間の左顎と思われる火葬骨が入っていた。この骨壷は備前風の焼締陶器で暗赤褐色をしている。この古墓は五輪塔の形状や出土遺物から、室町時代から江戸時代のはじめにかけてのものと考えられる。

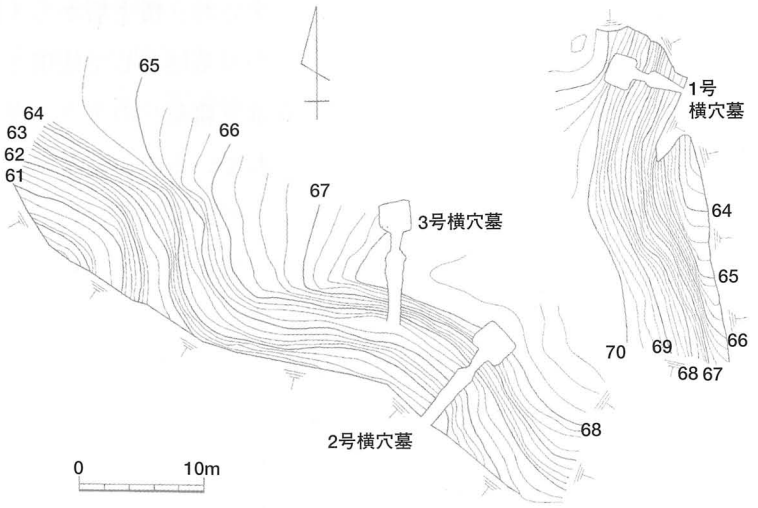
この古墓は性格の異なる「両墓制」で、丘陵頂上部が「埋墓（うめばか）」で中腹の平坦地が「詣墓（まいりばか）」であったと考えられる。

（石川　崇）

袋尻古墓群の中腹の平坦地

［袋尻横穴墓群］

袋尻横穴墓群は本遺跡群中央のやや西側、標高約64.00～66.00ｍに位置する。本遺跡群内に存在し、平成5年度調査を行った菅沢谷横穴墓の南側に位置する。当初は東側斜面に1穴確認されていたが、調査の結果、同丘陵の南側斜面にも横穴墓が2穴存在し、合計3穴存在することが分かった。そこで、尾根沿いに北側から1号横穴墓、2号横穴墓、3号横穴墓と呼ぶこととした。以下、概略を記す。



袋尻横穴墓遺構配置図

**・1号横穴墓**

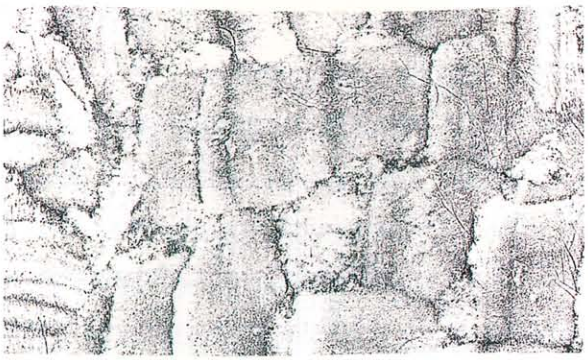
1号横穴墓は標高65～66ｍの東側斜面に位置する。調査前には墓道部の黒色土が一部露出していた。墓道は残存長約270㎝、最大幅約130㎝を測り、閉塞部に近づく程広がっている。玄門の長さは約105㎝、幅は60～85㎝、高さ約90㎝を測る。玄室は奥行き210㎝、最大幅260㎝で天井は床面の四隅から界線が伸び、天井に近づくにつれ薄れ、丸天井になる。最高部で140㎝を測る。奥壁に向かって右側には地山を削り出して作った屍床があり、坏の身と蓋が1セット置かれていた。左側には閉塞石と同じ石材で作られた石棺が安置されており、内部には人骨が2体分埋葬されていた。

石棺内に埋葬されていた2体の人骨はいずれも残存状況が比較的良好であった。奥壁に向かって右側を1号人骨、左側を2号人骨とした。埋葬方法は2体の頭部と下肢部を交互に置く対置埋葬で、被葬者は1号人骨は男性、2号人骨は女性と推定される。2号人骨の頭蓋骨の両脇には耳環が、右足首付近には坏身が副葬されていた。また、2号人骨は埋葬後に改めて頭蓋骨を置き直した形跡が認められた。

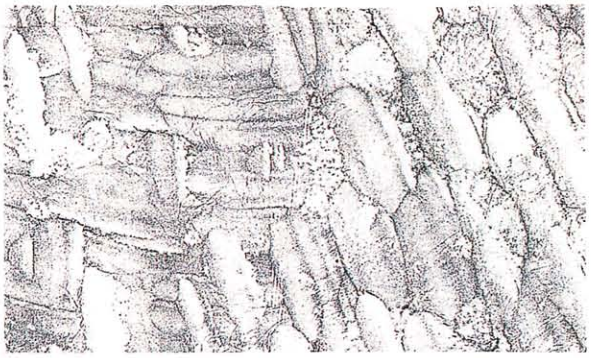
石棺は蓋石2枚、側石は手前に3枚奥に2枚、床石4枚と小口石2枚の合計13枚で作られていた。長さは内法約170㎝を測る。石材は白色凝灰岩で、鑿による丁寧な加工痕が観察できる。

閉塞施設は板状の白色凝灰岩2枚と自然石の凝灰岩で、加工した板状の白色凝灰岩の外側に板を立て、もう1つの凝灰岩で板を挟み込んで閉塞したものと推測される。

遺物は玄室内より坏の他、提瓶が出土し、墓道部からは坏・短頸壺・高坏が出土している。いずれも6世紀後半頃のものと考えられ、横穴墓の構築もほぼ同時期のものと考えられる。　（曽田辰雄）



閉塞石ノミ痕拓影（S＝１：３）



石棺蓋石ノミ痕拓影（S＝１：３）

１号横穴墓石棺内人骨出土状況

・2号横穴墓

2号横穴墓は本遺跡群の西側、標高64～65mの南側斜面に位置する。

墓道は、長さ5.5m、最大幅1.4mを測り、閉塞部に向かって右側付近より6世紀頃の須恵器の坏3点、高坏1点、提瓶1点が、またこれより平行する左側から𤭯(はそう)が1点出土している。

玄門は長さ1.5mで玄室に近づくにつれ広がっている。なお、高さについては天井部が崩落しているため確認できなかった。

閉塞施設は深さ約15cmの掘り込みがあることや閉塞石がみられないことなどから木板によって簡便に閉塞したものと思われる。

玄室は長方形に近い形状を呈し、最大長は約2.4m、奥壁の幅2.7m、玄門側の3mを測る。天井部は崩落しており確定できないが、おそらく1号墓と同じく低い丸天井タイプと推測される。

玄室に向かって左側には須恵器床が作られており、遺物は6世紀後半頃の提瓶2点、坏1点、短頸壺1点、鉄鏃2点、大刀1点が出土した。玄室右側は須恵器床などはみられなかったが、坏5点、短頸壺1点、耳環2点などが出土したことから、右側にも埋葬されていたものと思われる。また、玄室の壁に不整形な穴が3穴穿たれており、このうちの1穴より10世紀のものと思われる須恵器の坏が出土した。これによりこれらの穴は横穴墓の造営時期より後に穿たれたものだと思われるが、用途、目的は不明である。

この横穴墓は、遺物等の多くの出土や須恵器床の存在が確認されたが、玄室などが崩落をうけており保存状態が非常に悪く、詳細な調査ができなかったことは悔やまれるものである。　（落合昭久）

2号横穴墓正面から

・3号横穴墓

3号横穴墓は本遺跡群の西側、標高64～66mの2号墓と同じ南側斜面に位置する。

墓道は、残存長約5m、最大幅1.2mを測り、遺物は須恵器片が数点地山直上から出土している。

玄門は高さ約90cm、長さは1.4mで玄室に近づくにつれ広がっている。遺物は須恵器片が1点出土している。

羨門部の閉塞施設は約30cmの深い掘り込みがあることや、閉塞石がみられないことから2号墓と同じく木板で簡便に閉塞されていたと思われる。

玄室は正方形に近い形状を呈し、左壁の長さ約1.5m、右壁の長さ約2m,残存高1.2m、最大幅は2.1mを測る。天井は奥壁の二隅の界線は天井に近づくにつれ薄れ、玄門側の二隅は界線がみられない。形状はテント形を意識した丸天井のタイプと思われる。

屍床は奥壁側が礫床で、その手前玄室中央部は須恵器床で造られている。

人骨は礫床、須恵器床で1体づつ（1号人骨、2号人骨)、また2号人骨に脚部が乗るような形で1体（3号人骨）が埋葬されている。なお1号人骨は女性、2号人骨は男性、3号人骨は不明である。これらの1号人骨2号人骨の頭蓋骨は1号横穴墓と同じく置き直された形跡がみられる。

遺物は礫床部で坏4点、提瓶1点、耳環1点、須恵器床部で坏2点、刀子1点、左壁玄門側で坏の身と蓋が1セットと提瓶1点が出土した。なお、耳環は1号人骨の頭蓋骨の左下から出土している。

追葬については人骨が3体埋葬されていること、また屍床に違いや頭蓋骨が置き直されている可能性があることなどから、初葬後に1回以上は玄室の中に入っているものと思われる。

盗掘などをうけておらず、遺物、屍床の遺存状態が良好な上、人骨もほぼ完全な状態で確認されたこの横穴墓は、法医学などの分野においても貴重な資料になりうるものである。　　（落合昭久）

3号横穴墓玄室内

# 松江北東部遺跡

島根県松江農林振興センターでは、水田地61.4haを対象として、昭和62年度から10年計画で圃場整備事業を実施しているが、本庄平野一帯が本庄川流域条理制遺跡として周知されていたため、松江市教育委員会では工事の進捗状況にあわせて昭和61年から継続して発掘調査を実施している。本年度は7・10工区について調査を実施した。

**［松江北東部遺跡７工区］**

７工区については、平成６年度に遺跡確認調査を実施した際、出土遺物が多量に検出された地点について、さらに範囲を拡張して遺構の有無、遺物の性格、時代等を明らかにすることを目的として平成８年度に調査を行うことになったものである。

平成６年度調査で遺物が多量に検出された３地点について、２×40ｍのトレンチを設定し、東から順に佐波第１調査区、佐波第２調査区、原ノ後地区とし、遺物や遺構の検出に応じて拡張する形で調査を行った。以下、地区ごとに概略を記す。

1）佐波第１調査区

溝状遺構２、掘立柱建物１、小竪穴状遺構、ピット数穴が検出され、古墳時代を中心とした多量の遺物が出土した。

溝状遺構の一つは幅25～35㎝、深さ30～35㎝で断面は逆台形をなし、３分の２の深さまで拳大～人頭大の礫がぎっしりと埋められ、礫の上には板状のものをかぶせて埋め戻した暗渠状のものであった。東西に走る溝の底面は東に向かって下がっており、検出長は10ｍ程であるが、両側にさらに伸びるものと見られる。時期は基盤層の遺物からみて、中世以降である。

掘立柱建物は２間×２間の総柱の可能性のある建物跡である。この遺構面の覆土は土石流によるもので、遺物は古墳時代前期～後期に限定され、後期の完形に近いものが多くあるので、この時期の鉄砲水によって流失したものであろう。

この建物の北数ｍの地点では、圃場整備工事中に多量の須恵器、土師器片とともに滑石製の子持勾玉が採集された。調査区の近辺には古墳時代の集落があったものと思われ、この子持勾玉も集落内の祭祀に使われた可能性が想定できる。

2）佐波第２調査区

遺構は無かったが、古墳時代を中心とする弥生時代から中世までの土器類が多く出土した。

現地付近は度重なる本庄川の氾濫によって土石流と小さい侵食が繰り返されており、礫を含む層の上に粘土層が被り、その上にまた礫を含む層が被るという堆積状況が調査区の壁面でよく観察できた。弥生～中世各時代の遺構が流されて堆積したものであろう。

3）原ノ後地区

弥生後期後半の竪穴住居１棟、古墳時代後期の竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、ピット多数が検出され、弥生～古墳時代の遺物が数多く出土した。

調査区一帯は原ノ後遺跡として周知された場所であり、以前から須恵器、土師器等が多く表面採集されることで知られていたが、今回の調査で耕作土下には集落の痕跡が遺構として残っていることが判明した。

以上、調査結果の概略を記してきたが、本庄川流域のこの扇状地一帯は、一見フラットな地形に見えるが、地下の荒れ方が激しく、各調査区によって状況が違うので全体像がつかみにくい。報告書作成にあたっては地質学関係者と共同してこれまでの発掘成果を古地形図に落として行く形で古環境の復原を図って行くことが重要であると思われる。

（瀬古諒子）

子持勾玉

原ノ後地区遺構検出状況

［松江北東部遺跡10工区］

10工区は松江北東部遺跡の中で南西部、地形的には扇状地の先端部に位置する。この付近も本庄川の氾濫に伴う土石流の痕跡が各所に見られる所である。10工区では遺構の有無、遺跡の性格の確認などを主な目的として調査を行った。調査の結果、古墳時代から中世にかけての遺物が出土したが、そのほとんどが摩滅した破片のため、土石流によって流れ込んだものではないかと思われる。遺構はほとんど確認されなかったが、調査区の南側から土師質土器（かわらけ）30数枚が一カ所から数枚重ねて並んだ状態で出土し、周辺から小ピットが検出された。

これら土師質土器はすべて上を向けて２～４枚重なった状態で出土した。すべて底部が広く器高が低い皿形で底部には回転糸切りによる切り離し技法の痕跡が見られる。またこの土師質土器の上から鉄製品が交差するように出土したが、詳細は不明である。周辺のピットについては周りの地盤が軟弱であることやピットの規模が小さいことから、住居のような建物よりも一時的な建物が建っていたと考えられる。周辺に墓壙となるような土壙はないことからこの土師質土器は埋葬に使用したのではなく、祭祀に使用しその後に並べて廃棄したと考えられる。土師質土器の形状や付近から出土した白磁片から12～13世紀代の遺構と考えられる。

遺物が調査区の南東側に集中して出土しているのに対して、それより先はほとんど遺物が出土しなかったことから、集落の境界線が南東側にあったと推測される。　（石川　崇）

10工区出土の土師質土器

# 第3章　普及活動

**1．書籍刊行**

・『財団法人松江市教育振興事業団埋蔵文化財課年報Ⅰ』（1997年３月）

・松江市文化財調査報告書 第74集

『柴Ⅲ遺跡発掘調査概要報告書』（1997年３月）

・松江市文化財調査報告書 第75集

『小無田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（1997年３月）

**2．現地説明会の開催**

松江市教育委員会と共催で現地説明会を実施した。

・米坂古墳群　　（開催日）平成８年10月27日

・小無田Ⅱ遺跡　　（開催日）平成９年２月８日

**3．出土遺物展示会**

島根県埋蔵文化財センター・松江市教育委員会と共催で出土遺物展示会を実施した。

・松江北東部遺跡７工区　　（開催日）平成８年11月30日

米坂古墳群
現地説明会風景

小無田Ⅱ遺跡
現地説明会風景

# 第４章　平成７年度以前の調査状況

| 年度 | 遺跡名 | 所在地 | 遺跡の概要 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|
| H.5 | 釜代１号墳ほか | 西浜佐陀町 | 前期古墳。主体部２基確認。第２主体部は粘土槨を伴う長大な割竹形木棺で、水銀朱・鏡・玉類出土。第１主体部は現状保存。 | 1994刊 |
| H.5 | 菅沢谷横穴群 | 乃白町 | 6世紀後半から７世紀前半の横穴墓群。 | 1994刊 |
| H.5 | 向遺跡 | 国屋町 | 奈良～平安期の掘立柱建物跡検出。 | 1994刊 |
| H.5 | 論田４号墳 | 西津田 | （報告書作成事業）後期の方墳。論田横穴墓群の調査成果も掲載。 | 1994刊 |
| H.5 | 柴尾遺跡 | 上東川津町 | 主体部を３基もつ前期古墳と黒曜石を中心とする石器生産遺跡検出。 | 1994刊 |
| H.5 | 角森遺跡 | 八幡町 | 弥生後期の土器数点出土。 | 1994刊 |
| H.5 | 敷居谷古墳群 | 東生馬町 | 5世紀末の方墳ほか２基の方墳検出。後世の祭祀関連の遺物出土。 | 1994刊 |
| H.5 | 出雲国分寺跡 | 竹矢町 | 完形で良質な瓦ばかりの瓦溜まり検出。 | 1995刊 |
| H.5 | 深田遺跡 | 大庭町 | 奈良～平安期の道路状遺構検出。 | |
| H.5 | 岩汐峠遺跡ほか | 大井町 | 一字一石経塚検出。 | 1999予 |
| H.5 | 出雲国府跡 | 大草町 | 直接国府に関連する遺構は検出されなかった。 | |
| H.5 | 勝負谷遺跡 | 大庭町 | さいの神と積み石の塚、古代と考えられる道路状遺構検出。 | |
| H.5 | 松江北東部遺跡 | 上本庄町 | 遺物包含層のみで遺構は検出されなかった。 | 1999予 |
| H.6 | 柴尾遺跡 | 上東川津町 | 縄文早期の土器を伴う石器生産遺跡検出。前期古墳主体部（割竹形木棺）から翡翠製勾玉・鉄鏃出土。 | 1996刊 |
| H.6 | 敷居谷古墳群 | 東生馬町 | 中期末方墳１基。後期初頭の方墳主体部中から太刀・刀子各１出土。 | 1996刊 |
| H.6 | 松江北東部遺跡 | 上本庄町 | 遺物包含層のみで遺構は検出されなかった。 | 1999予 |
| H.6 | 米坂遺跡 | 西尾町 | 古墳中期から後期初頭の掘立柱建物群検出。 | 1999予 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| H.6 | 舟津横穴群 | 薦津町 | 横穴墓２穴と近世貯蔵穴３穴を検出。 | 1996刊 |
| H.6 | 筆ノ尾横穴群 | 東長江町 | 6世紀後半～７世紀中頃の横穴墓群。１穴に６体埋葬の横穴墓あり。 | 1996刊 |
| H.6 | 寺の前遺跡 | 山代町 | 自然流路の痕跡中から、鴟尾・円面硯・輸入陶磁器の破片が出土。 | 1996刊 |
| H.6 | 黒田畦遺跡 | 大庭町 | 奈良時代の土壙内から墨書土器・製塩土器・律令様式の土器が出土し、役人関連の遺跡が近辺にあることを示す。中世の土壙墓６基検出。 | 1996刊 |
| H.6 | 二名留遺跡 | 乃木福富町 | 若干の遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。 | 1996刊 |
| H.6 | 向山１号墳 | 大庭町 | トレンチ調査で未盗掘の石棺式石室発見。 | 1996刊 |
| H.6 | 出雲国分寺跡 | 竹矢町 | （報告書作成事業） | 1996刊 |
| H.7 | 向山古墳群 | 大庭町 | 32×20ｍの方墳。墳裾から子持壺出土。石棺式石室内の副葬品は掻き出されており、前庭から馬具・武器類・玉・須恵器の細片が出土。 | 1997刊（概報） |
| H.7 | 遅倉横穴群 | 朝酌町 | 山陰地方初現期タイプの横穴墓検出。 | 1999予 |
| H.7 | 松江北東部遺跡 | 上本庄町 | 遺物数片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。 | 1999予 |
| H.7 | 宮尾古墳群ほか | 西川津町<br>上東川津町 | 室町後期～安土桃山時代の五輪塔２基のほか、土壙群を検出。 | 1997刊 |
| H.7 | 袋尻遺跡群 | 乃白町 | 竪穴住居跡７棟、土壙５基、後期古墳２基、近世墓２基を検出。 | 1998刊 |
| H.7 | 四王寺跡 | 山代町 | 調査範囲が狭く、四王寺との関連性を判断することはできなかった。 | 1997刊 |
| H.7 | 大久保谷遺跡 | 乃白町 | 焼土壙、ピットを検出。遺物は数点出土したのみ。 | 1997刊 |
| H.7 | 川原後谷横穴群 | 川原町 | 墓道の一部のみ調査。 | 1997刊 |
| H.7 | 寺山小田遺跡 | 矢田町 | 古墳中～後期の建物跡検出。２棟の建物内から玉類出土。 | 1997刊 |

**埋蔵文化財課年報Ⅱ**

1998年3月

発　行　　財団法人
松江市教育文化振興事業団

印　刷　　株式会社　谷　口　印　刷
松江市東長江町902-59

米坂古墳群 埋葬施設D